

伺ったのは、「ダイロクキッチン」と名付けられた、地元の東伊豆町消防団第六分団旧器具置場をリノベーションしたシェアキッチンスタジオ。

駄菓子屋のようなローカル感を感じさせる窓ガラスに書かれた絵は、ここに来る小学生が描いたもの。地元の高校生が開催している「子ども食堂」やお年寄りの集いにも使われ、毎週水曜日にはカフェがオープンしています。

地域にすっかり根付いて馴染んでいるこの場所は、荒武さんが地域おこし協力隊を務めた2016-2019の3年間、事務所として使っていた場所で、リノベーションとして関わった2つ目の物件です。



▲消防団の器具置き場をリノベーションしたダイロクキッチン

1つ目の物件は学生時代に仲間とリノベーションした公民館の離れにある小屋。当時、東京で「空き家改修プロジェクト」としてまちづくりや建築に関わる6人のメンバーで空き家改修のフィールドを探していた矢先に知人を介して知ったのが稲取でした。しかし、リノベーションへの熱とは裏腹に、地域のニーズに全くマッチしていなかったという現実突き当たったそうです。

3つ目の物件は、造船業のものづくりの場であった場所をリノベーションしたイーストドックというシェアオフィス。ここが今の本拠地になっています。コンクリートの打ちっ放しの雰囲気が港町らしさを感じさせるこの場所は、2階から稲取の港の様子が一望できる最高のロケーション。



▲現在の拠点であるイーストドック

「貰い物なんです」という収納箱もなんだかレトロな感じが、港の空気と相まってのんびりとした時間の流れを感じさせてくれます。

「役場や地域の人と関わることで『地域に関わる責任』を教わりましたね。」

学生の活動では自分たち本位にアクションを起こしていたけれど、地域おこし協力隊を経て、現在に至るまでたくさんの方からの応援・支援をもらったそうです。もともと責任感が強い荒武さんですが、地域の方や役場の方にお世話になった恩返しをしたいという思いも強いそう。

そして今、取り組んでいるのは、「まちやど協会」との関係の中で着想した、宿泊業の展開。湊庵（so-an）と名付けたLLC（合同会社）を設立し、湊の宿をシリーズ化してオープンさせていくというプロジェクトです。

湊庵（そうあん）は、「湊の離れ的な場所」というイメージを込めて名付けた名称。路地裏や、干物の光景、漁師さんの存在、そして笑顔が素敵なおばあちゃんがいたり。そんなイメージを反映しています。

コンセプトは、「港暮らしを体験できる宿」。

1件目「錆御納戸（さびおなんど）」と名付けた宿のオープンが2020年7月を予定しています。

錆御納戸というのは、日本の「色」の名前。

そんな粋なネーミングを1件目の宿に選んだ荒武さんにとって、この稲取の未来のイメージは「渋カッコいい」だという。



▲イーストドックから見える稲取の港

時代を経てところどころ虫食いだったり、錆びていたりする景色が逆にカッコよさを演出している。そんな感覚こそ稲取にぴったりだとのこと。

宿には既存の宿泊客とは異なる「稲取のローカルな良さに目を向けてくれる人」を呼び込みたいと言います。クラウドファンディングも開始する予定で、「2020年は勝負の年です。」と力を込めて語ってくれました。

荒武さんが稲取で活動している理由は人のつながりだけではありません。稲取の景色を見た時に、この土地でやっぴいこうという確かな直感と湧き出る力を感じたそうです。

「半分は、一目惚れみたいなものです」と教えてくれました。



▲荒武優希（あらたけ ゆうき）さん

人と交渉したり、プロジェクトを立ち上げ行動を起こしていく。この稲取では、自分の行動に対してすぐに反応を得られることも多く、やりがいを感じるそうです。

ついつい「みんなと違ったことにチャレンジしたくなる」荒武さんが選んだ稲取でのリノベーションまちづくり、今年はさらに注目の展開になりそうです。

（文・写真：一般社団法人 SACLABO）